
ゼロの使い魔 - 友情OR愛情

RENTO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロの使い魔 - 友情OR愛情

【Zコード】

N7994M

【作者名】

RENTO

【あらすじ】

内気な性格の16歳の伊藤誠也は不運な事故では命を落とした。友達も家族もいない彼の死を悲しむ者などいなかつた。しかし、彼の死の先に待っていたのは天国でも地獄でもない真っ白の世界。誠也の前に現れた天使と名乗る子供は彼に言づ。「あなたの知らない愛を見つけてね」と。そして一度目の目が覚めた時、桃色がかかつたブロンドの髪をした少女が隣で眠っていた

暗い人生に別れを告げて（前書き）

注意書き

この小説は、ゼロの使い魔の二次小説です。作者はルイズがゼロの使い魔では一番好きなので、ルイズは良い子にしてます。シンデレラはありませんので、ルイズツインデレを期待していた方々はウインドウを消していただく事をおすすめします。ルイズはもう一人の主人公とさせます。カップリングはルイズと主人公ではなく、主人公と他の誰かになります。

暗い人生に別れを告げて

友情。俺はそんな物にずっと憧れを抱いていた。友達ができるのなら、どんな事だってやってみせた。話題を合わせるために苦手なアニメやニコースやら、色んなものを見てきた。でもその努力は僅く散った。噂は飽きればなくなってしまつ。それは話題と同じだ。俺が一つのアニメを理解する頃には皆は他のアニメに夢中になつていた。でも俺は友達が欲しかつた。他の人が話しているのを盗み聞きして何が好きなのかを知る。それを俺は小学校4年生くらいの頃からやつてきた。でも、成功した回数は0。皆俺の存在すら知らないのかもしない。そんなに地味かな……俺つて。

「伊藤誠也君、一緒に弁当食べよう」

俺が下を向いて、机と睨めっこしていた時だ。鈴に上品な声をした桃色の髪の小柄な女の子がお弁当を持って俺の名前を呼んでいるではないか。先生か、特別な用事以外呼んでくれなかつた自分の名前を彼女は呼んでくれた。とたんに回りに花が咲いたような気分だった。

「お、俺何かでいいのかな」

「えー？ 私、伊藤君と食べたいから誘つたんだよ？」

死んでもいいくらいにうれしかつた。ただうれしい気持ちでいつもいだつた。彼女の笑顔はまるで天使の様に可愛らしかつた。それにつられて俺も笑つていた。こんな風に話しかけられたのは本当に何年ぶりだろうか。それまで近所のおばさんとかしか話した事なかつた。高校に入つて、初めて他の子と話せた。この学校に入つて良かつたなあ。

「で、でもどうして俺の名前を知つていたの？」

「いつも見てたから……あ、私の名前は」

「桜井桃さん……でしょ？」

「どうして私の名前を？」

「お弁当のと」……名前書いてある……」

小学生みたいだなあと一瞬思つてしまつくらいの字。笑いそうだったけど嫌われると思い必死に我慢していた。桜井さんは顔を真つ赤にしていた。俺に見られたことがよっぽど恥ずかしかったのだろうか。心中で誤つた。

「ま、まあいいわ……食べましょ」

「う、うん!」

俺達は桜の木の下でお弁当を食べた。俺はコンビニで買つたおにぎり二つとパン一つ。桜井さんは豪華なお弁当だった。やっぱり上品な顔立ちや喋り方はお嬢様だからかな。友達も多いんだろうな。でもどうしてこんな俺をお皿に誘つてくれたのだろ?。庶民の俺が……。

「それにしてもあなた、それだけでお腹大丈夫なの?」

「うん。大丈夫だよ」

「……だめだわ、私のを食べなさい」

「えー?」

桜井さんはお弁当の蓋を俺の前に置き、何個か豪華そうな卵焼きを置き、更には豪華そうなお肉やら魚やらを置いた。そんな食べ物を見たことない俺は啞然とその様子を見ていた。お肉なんて本当に何年ぶりだろ?。魚も……。卵焼きも。こ、これがお弁当交換とかそういうのなのだらうか。だとしたら俺のおにぎりも分けなきや。

「え? くれるの?」

「うん……お、お弁当交換……」

「ふーん。初めて見たけど美味しそうね、じゃあお言葉に甘えて」お嬢様がコンビニのおにぎりなんて違和感ありあり。やっぱおにぎり食べるときもお箸なんだな。俺はふつと笑つてしまつた。それを見た桜井さんが顔赤らめて「なによ」と言つてきたので「な、な

んでもない」と返した。俺はこの時、彼女に一つの事を教わった。
一つは「友情」。そしてもう一つは「愛情」だった。

それからこつもの、俺と桜井さんは学校の休み時間やお昼を共に過ごした。とても幸せだった。

そう。幸せだったのだ。

「……ここは？」

目を覚ました。知らない場所。現実にはありえない真っ白な空間。終わりの無い空間。ふと気がつく。体が軽い事に。まるで宇宙空間にいるような。そんな感触。頬をつねつてみた。痛くない。夢なのかな。そしてまた気がつく。薄くなっていることを。自分の体が消えていく。でも、感触はない。

「……う、嘘だろ」

死んでるの？夢なら覚めてほしかった。死んでいるならせめて桃に別れを告げたい。え……。あれ。桃？誰。さっきまで知っていたはずの大切な子の名前すら思い出せない。それどころか顔すらもう……。これは夢。夢だ。悪い夢。『夢だったらあなたはとっくに目覚ましで目を覚ましているわ』

誰もいないはずの空間に懐かしい声がした。優しい声。母親みたいにな……。

「誰？」

『天使よ。神様の隣によく居る小さな天使』

『天使？……なら天使さん、教えて……俺はどうなっているの？』

『そうね。あなたは選ばれたって言つたら傷つくかな……あなたは死んだのよ』

死んだ。そうか、死んだのか。とすぐに理解するほど俺は単純ではない。これは誰かの悪戯に違いない。死？そんなの俺の記憶にない。

それに小さな天使って。俺より背が大きいではないか。

「納得できない。早くここから出させてくれないか？」

『無理よ。あなたは死んだ。それで伊藤誠也の人生は終わり』

「簡単に人の人生を終わりとか言うなよ！」

初めて怒った気がする。

『私は伊藤誠也の人生は終わりと言つたの。あなたにはまだチャンスがあるわ』

「チャンス？」

『あなたは見つけなければいけないの。愛と友情を』

「え……」

『あなたは神様の手違いで大切な子の記憶を丸々無くしたわ。だから見つけるの』

『そういえば』、「桃」って俺は確かに言つていた。でも、それが誰なのか今は分からなくなっている。俺は早い歳に両親を亡くし、近所のおばちゃんに育ててもらつて、16歳まで生きてきた。それまで学校行けなかつたから、中学3年生まで家で猛勉強して、高校に受かつて……友達も全然いない。親の愛情を知らない。友の友情を知らない。

「俺……大事な何かを忘れてる気がする」

『それを見つけるために、あなたは行くの。これからつらい事もあると思う』

「うん」

『でも、忘れちゃダメ。あなたには大切な子が居ることを。その子にたくさん救われたことを』

「うん」

『あなたがすべてを思い出した時、あなたは帰るわ……彼女の元に前世の記憶を持つて旅に出る。伊藤誠也の記憶と共に君を探すため……。赤い光が俺の前に現れた時から、物語は始まっていた。長

い長い物語。暗い闇の様な人生に別れを告げて、光を探しに俺は一步一歩光に歩み寄る。

『一緒にご飯食べましょ』

『だめだわ、私のを食べなさい』

『お言葉に甘えて……』

『ありがとう』

また必ず帰つてくるよ。名前も顔も分からぬ君の元へ。

そして俺は目を開けた。そして初めに視界に入つたのは、可愛い笑顔をした桃色がかかつたブロンドの短髪に美しい鳶色の目をした小さな女の子だった。

暗い人生に別れを告げて（後書き）

後書き

桃は前世でのヒロインです。彼の中の「大切な子」は永遠に彼女な
のかかもしれませんね。

誠也君が転生した時のルイズの歳は1歳。ルイズの方が早く生まれ
たので。

駄文に付き合ってくれてどうもありがとうございます。こんな文章
でよければ、また見に来てくれるとうれしいです。

異世界と双子の傳い番い（前書き）

お知らせ

ルイズと主人公の関係を変えることにしました。主人公はルイズの双子の弟と言う事にします。尚、この設定はもう変えることはないので不満がある方は、この小説を読むのをやめる事をお勧めします。まだいけるという方は読んでくれるとうれしいです。また、指摘やアドバイスなど原作の設定が間違っていた場合、教えて貰う嬉しさです。

異世界と双子の傳い誓い

俺の目の前には桃色の髪をした小さな少女。名前はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。ヴァリエール家はトリスティンの国の公爵家で、ルイズはその公爵家の三女で今は5歳。俺がこの国に、前世の記憶と共に生まれ変わって4年経った。俺の新しい名前、「ギルバード・フランシス・ラ・ディエント・ディ・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール」。俺はルイズの双子の弟としてヴァリエール家の長男になった。前世で家族もいなく、兄弟すらいなかつた俺には幸福の環境だった。食べ物も、高級で美味しい。さすが貴族だけあるなと毎度思っている。

「ギル！ギル！どこにいるの！？」

双子の姉、ルイズが俺を呼んでいる。また乗馬の練習に付き合わされるのかと思いながらルイズの元に行く。ルイズは双子の姉であつて、俺にすごく優しくしてくれる。前世の性格から、現世での俺も内気な性格になってしまい、中々友達が作れない中、ルイズは俺を励ましたり、勇気付けたりしてくれる。

「そんなに慌ててどうしたの？ルイズ

「ギル！どこに行つてたの？探したのよ」

「少々魔法の練習をしてたんだ」

「ギルは努力家ね。でも友達を作る練習もしなくちゃだめよ」

ルイズは5歳なのにかなり大人っぽい。どこでそんな言葉を覚えてきたのか分からぬけど、やはり気になつてしまふ。でもまあ、中身は16歳の見た目5歳の方がよっぽどおかしいと思つけどな。

「努力するよ」

「頑張つてね。そうだ！今日は6歳の誕生日よね？」

「あー！そう言えば……」

「お茶会パーティーでもしましょ。一人である池で」

池。それは俺とルイズの秘密の場所。母、カリーヌに魔法の事で叱

られる時はいつも一人で秘密の場所へ行っていた。俺達が5歳になるまでは母もここへ来ていたが、今は魔法だの決闘だと俺達に厳しくしてくる。というか初めは魔法が存在するなんて信じられなかつたけど、最近になってやつと理解した。でもそんなもの、本当に前世の記憶と共にやつてきた奴ができるのだろうかと疑問に思う。

「そうだね。風も気持ち良いし」

「そうと決まれば準備しましょう。ギルはそうね……食器の仕度をしてね」

「うん。見つからないようにしないとね」

「そうよ。お母様に見つかったら大変だわ」

まるで今日6歳になつたとは思えないくらい大人っぽい会話を俺達はしていた。喋れたのは3歳くらいのときでそれまでは何かと伝えるのに苦労した。家族にも初めは人見知りをしてしまつていて、両親を知らない俺はすぐに母父と認めることができた。

「着いたわ

「風が気持ち良いね、ルイズ」

「うん！」

俺は転ばないようにルイズの小さな手をとつた。ルイズは誰かに似ているような気がする。そう、とても懐かしい誰かに。俺がもし、ルイズと他人で会いついたら好きになつていたかもしれない。

「ねえギル。約束を立てましょう

「約束？」

「そう！」

「何の約束？」

『私達はずっと一緒にいる事を誓いました』
『ずっと一緒に……』

でもその約束が叶う事はなかつた。

それは一年後の事だつた

どつづきを選ぶかなんて、そんなのすでに決めていたはずなのに……。

『約束』
『約束よ』

異世界と双子の傳い番い（後書き）

後書き

お気に入り登録してくださつた方、ありがとうございます。こんな
駄文でも付き合つてくれるなんてとてもうれしいです。

今日は、短いのですね。

もつと増やしたいと思っているのですがやはり一次小説は難しいで
す。記憶はないけれど大切な子『桃』ちゃんと、この世界での大切
な姉『ルイズ』と交わした約束。ギルバード（誠也君）は一体どっ
ちを選ぶのでしょうか。

幻滅した主人公と狼と鏡（前書き）

前書き

四三九

幻滅した主人公と狼と鏡

「ギル、そこにある酒持つてくれ！」

「はーい」

俺は16歳になった。ギルバードは俺の名前。俺は今賊の一員として働いている。こんな展開、俺すらも予想していなかつた。でも、それが現実なんだと俺は思つていて。俺は6歳7歳の誕生日、父親の稽古に耐え切れなくて家を出た。そして道端で賊に捕まるという不幸な運命に出くわして……。今や賊の一員。あれから10年というのに、未だかつて俺が行方不明になつているという情報は耳にしない。それどころか10年間、一度も俺を探している兵士なんて見つことがなかつた。正直幻滅してしまつた。やっぱ両親は子供を愛せないのか。前の俺の両親の様に……。いやいや。マイナス思考は禁句禁句！俺はもうこの賊の一員として生きていく！そう決めた。ヴァリエールの名を捨て、貴族を捨てて。でも、俺はまだ心に残つたあの家族への傷は一つだけあつた。それは約束。ルイズと交わしたもの小さな約束だ。

「ギル、調子はどう？」

「テディ」

「相変わらずこき使われてるわね」

「はは……」

テディは俺と同い年の女の子。まさか賊に女の子がいるとは思わなかつた。だから初めはずつと男かと思っていた。彼女はいつも俺を気にかけてくれる。両親とは違つて。これが愛と言つものなのだろうか。

「そりいえばあなたつて貴族だったの？」

「えー？」

「あら違ひの？ 隰尊してゐるから」

「そつなかい！？」

「ええ。あなたを拾つた時に格好が高価な物だつたらしくね

「あ……盗んだんだよ」

「あら。勇氣あるわね、たつた一人で貴族様のものを盗むなんて」

「はは

俺が元貴族だつたといふことは皆は知らない。言つたら裏切られたみたいに思われるから。でも、嘘を吐くのも限界があるのかもしない。

「ところでテディ。俺達は次はどこに行くんかい？」

「アルビオンよ、エルフ狩りに行くのよ

「エルフを？ どうして？」

「エルフは人間にとつて危険な存在だもの。それにお金にもなるし

エルフか。そういうえばライズもエルフを怖がっていたな……。でも本当に危険なのだろうか。エルフだつて言葉は分かるはずだし、話せば危険じやないと思うけどな。それにしても俺はこつも簡単にエルフの存在を納得してしまうとは……。

「見て、あれよ

「ええええええええええ」

まるでどこかで見たことある……。テレビで。

あの浮いてゐる城……。

そして俺が予想しなかつたハーレム伝説が幕を開けた

。

+

+

+

+

+

トリスティン魔法学院。

そこはトリスティンから馬で2時間ほどかかる学院。そこに、多数の生徒が無限に広がる大草原にいた。そこで、一人の桃色の髪をした少女が何やら詠唱し始めていた。

+

+

+

+

+

「おい、ヘルガ！貴様また人の物盗みやがつたな！」

「盗られる方が悪いんだよ！」

「つたく！お前なんか出てけ！」

「どいつもこいつも……動物に優しくしゃがれってんだよ……。狼には特別優しくしゃがれ！」

「ちえ……新しい主人探すかなあ」

え……

「鏡……？」

ヘルガと呼ばれた狼の目の前には輝く鏡のよつな物体。好奇心旺盛なヘルガはすぐさまその鏡に興味を持ち始めた。近くにあつた小石を投げてみた。

「…………よし」

そしてヘルガは鏡の中へと入つていった。

幻滅した主人公と狼と鏡（後書き）

後書き

展開早い早い早い！－！－！

何かすゞめんなさい－×10000！

サイト君は誰かの使い魔になりますのでそことここによろしくです。

皇太子の夢と嘘と幻滅と（前書き）

前書き

色々注意です

皇太子の噂と嘘と召還と

「テディ、君は大切な人はいるかい？」

自分でも分からない。どうしてこんな事を言ったのか。

「そうね……私って両親を小さい頃に亡くして、守ってくれる人がいなかつたの」

「そりなんだ……」

「そう。たった一人で生きてきたからそういうのはいないかな」
一人で生きてきた。まるで前世の自分みたいだ。テディの気持ちはすごい分かる。助けを求めたって誰も助けてくれない。皆、見て見ぬ振りだ。だから信じられなかつた。人を。
「暗い話は止めましょう?」

「そうだね。ごめん」

「ねね、知ってる? アルビオンの皇子の噂」

「ウェールズ皇太子の事かい?」

ウェールズ・テューダー。アルビオン王国の皇太子で『プリンス・オブ・ウェールズ』で知られている、風系統のトライアングルメイジ。

「そうよ」

「彼がどうかしたのかい?」

「彼ね……ふふ……女の子つて噂があるのよ

「えええ! ?」

お、女の子? 想像以上なテディの発言に腰が抜けそうになつた。よく考えてみる。テディはいつも俺をからかうし。これもまた冗談だ。しかし、皇太子までも冗談に使うとは……流石テディだ。

「ちよつと! これはあくまでも賊の中の噂よ? 本氣にする奴が馬鹿よ」

「賊だけ?」

「そうよ。ヒューズ船長が皇子様に会つて握手してみたんだつて。

そしたらその手が女性だったとか

「へー……」

ヒューズ船長はこの賊の頭。俺を雇ってくれた恩人。見た目は戦でできた傷か、傷だらけである。そのヒューズ船長が皇太子と顔見知りだったとは……。しかしあの人は少々鋭いところがあるからな。俺が貴族だって事を一発で見破つたし……。

「でもまあ、噂に尾ひれがついたついでいうじゃない?」

「そうだね」

「アルビオンについたわ、行きましょ」

+++
++
++

「あなた誰?」

大空をバックに、桃色のかかったブロンドの髪を肩まで伸ばした少女が自分の顔をまじまじと覗き込んでいた。周りからは笑い声が聞こえてきた。ヘルガは冷や汗たらたらでこの場の状況をのみこもうと必死だった。

「お前!」
「誰だよ……」

「名を教えてもらつとき自分から召乗るもののみ

「お前が先に聞いてきただろ!~」

「……そ、 そうね」

じょんと咳をして桃色の少女は言った。

「私の名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリ
ホールよ。 一つ名は……じょん……『ゼロのルイズ』よ……」

皇太子の噂と嘘と召還と（後書き）

後書き

ウェールズ好きな人は去った方がよろしいかと思います.....。

そしてアンリエッタ×ウェールズ好きさんも.....。

ゼロの使い魔と初キスと

「ルイズ、『サモン・サーヴァント』で平民を呼びだしてどうするの？」

俺が自分の名を名乗るうとしたとき、ルイズの後ろから野次が飛んできた。しかしルイズは聞こえないかのように無視していた。ただじっと俺のほうを見ていた。

「あなた……剣術とかできる?」

「しょ、少々……」

「本当?ならあなたは私の良い使い魔になるわ!」

え……今何ど!?使い魔?使い魔って言いました?使い魔って聞いた事あるぞ……主の盾とか目とか足とか……。もしかしてあの鏡つて使い魔呼び出すときの。あれって前に契約した時も出てたぞ?入つたら何か使い魔になれって言われたし……。

「ゼロのルイズ!流石だな平民呼び出すなんて!」

へ、平民?この俺が?何でそんな事になってるんだ。俺はあれだぞ、伝説名乗れるほどの狼だぞ!何で俺が平民にランク下がってるんだ……。

「ミスター・コルベール!」

「何だね?ミス・ヴァリエール」

「私、彼を使い魔にします!」

「そりが。なら儀式を」

それまでルイズの視線はコルベールとかいう中年親父に向けられていたが突然俺に向かた。

「『めんなさい。あなたの一生で一つしか無いものを奪つてしまつ

の』

「え

「本当に『めんなさい』」

ルイズは何回もあやまつた後に呪文らしき言葉を唱えた。

「我が名は、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ヴァリエール。五つの力を司るペントагон。この者に祝福を『え、我の使い魔となせ』

ルイズは序所に俺のほうに近づき、そしてお互いの唇が重ねあつた。

「！？」

俺は振りほどこうとしたが、腕を無理やり押さえられ身動きができるなかつた。数秒が経ち、ルイズから唇を離した。顔が真っ赤なのはお互い様だつた。

「ごめんなさい」

その一言を言うと、コルベールに報告しに立ち上がつた。

「終わりました」

未だに顔は真つ赤だ。俺も人間とキスするのは初めてビックリか今までキスしたことがなかつた。しかもお相手が貴族様だとは。それに『ヴァリエール』聞きなれた家名だ。確かトリステイン國の公爵家とか何とか。そんな事を考えていると、また周りから侮辱の声が上がつた。

「ただの平民だから契約できたんだ！」

「平民……。伝説の俺が傷つくわあ……。

「そいつが、高位の幻獣なら『契約』なんて出来ないって…」「ゼロのルイズの使い魔だから」「ゼロの使い魔」ね！「

「きつとかなり弱いんでしょう！」

その一言で、今まで無視していたルイズが怒鳴った。

「私はともかく、使い魔を侮辱しないで！」

「ルイズのくせに生意気よ！」

「『香水』のモンモランシー、あなただけ自分の使い魔を侮辱されたら悔しいでしょう！？」

「な……」

俺は頭の中で新しい『主人様』『ルイズ』に拍手を送った。モンモランシーと呼ばれた金髪の巻き髪の少女は言葉がつまつた。

「今後一切、私の使い魔を侮辱しないで

「本当に生意気よ……ムカつくわ

俺はルイズに引っ張られ、大きな大きな城へ入つていった。そして俺はふと、何かに気づいた。

「なあルイズ

「何？」「

「契約したら手とか頭とか痛くなるんじゃないの」

「そうよ？……ってあれ？」

「俺、全然痛くない

「……どういう事かしらね

「あれ？ いつの間にかルーンが刻まれてる

「あら本当

「……まあいつか。一件落着つて事で」

「そうね！ もう疲れちゃった。ヘルガ、私のベッドによければ使つて？」

「え！？貴族様のベッドに！？」

「ええ。私はシエスタの部屋で寝るわ」

「シエスタ？」

「後で紹介してあげる」

۱۰۷

「そうそうヘルガ」

—
h
?

卷之三

卷之二

ゼロの使い魔と初キスと（後書き）

後書き

よくある話。

最後まで書いた話が閉じるボタンや他のボタンを押すとすべてが消えてしまつ……。はあ……。

ルイズ、何かギル君の事覚えてないんじゃね？って思った人、真実はいつも次回……にあるかも知れないです。たくさんのお気に入り登録ありがとうございます。

夢と思い出と秘密の場所

ルイズはベッドの上で夢を見ていた。トリステイン魔法学院から馬で三日ほどの距離のある、生まれ故郷のラ・ヴァリエールの領地にある屋敷が舞台だった。夢の中のルイズは男の子と一緒に逃げ回っていた。迷宮のような植え込みの陰に隠れ、追つ手をやり過ごす。ルイズは男の子に手を握られ、走った。一つの月の片一方、赤の月が満ちる夜。

「ルイズ、ギル、どこに行つたの？ ギル、あなたは稽古があるのでしょう？ ルイズ、あなたはまだ説教が終わつていませんよ！」

そう言つて騒ぐのは母だった。夢の中のルイズはデキの良い姉達と魔法の成績を比べられ、物覚えが悪いと叱られていた。一方の男子は父親の稽古に耐え切れなくなり、ルイズと一緒に逃げ出していた。二人が隠れた植え込みの下から誰かの靴が見えた。

「ルイズお嬢様が難儀だねえ。ギルお坊ちゃんは才能があるというのに」

「全くだ。上の二人のお嬢様はあんなに魔法ができるというのに」ルイズは悲しくて、悔しくて歯噛みをしていると手を握つていた男の子がルイズの頭を撫でてやつた。その手からたくさんのがくもりが伝わってきた。そして二人は自分達が呼ぶ『秘密の場所』へ中庭の池に向かう。そこは二人が唯一安心できる場所だった。あまり人の寄り付かない、忘れ去られた池。池の周りには季節の花々が吹く乱れ、小鳥が集う石のアーチとベンチがあつた。池の真ん中には小さな鳥があり、そこには白い石で造られた東屋が建つていて。鳥のほとりに小船が一艘に浮いていた。舟遊びを楽しむための小船であった。しかし、今ではもうこの池で舟遊びを楽しむものはいない。姉達はそれぞれ成長し、魔法の勉強で忙しかつた。そんなわけで、忘れ去られた中庭の池とそこに浮かぶ小船を気に留めるものはこの屋敷にルイズと男の子以外ない。ルイズは叱られると決まってこの

中庭の池に浮かぶ小船の中に逃げ込むのであった。男の子も父親の稽古から逃げるときは決まってそこに。夢の中の幼いルイズと男の子は小船に忍び込み。用意してあつた毛布にもぐりこむ。

「ルイズ、泣かないで」

「あなたには分からないわ、ギル」

ギルと呼ばれた男の子はずっと握っていたルイズの小さな手を離した。

「ギルはつらくてもお父様や皆に才能があると言われているもの。それにくらべて私は」

「諦めちゃだめだよ、頑張ればルイズだつてきっとできるさ」

「……私、魔法なんかできなくたつてギルと一緒に居られればそれでいいの」

「僕もだよ。だからルイズを守るために僕はもう逃げ出さない」
ギルは小指を差し伸べてきた。ルイズは小さく首をかしげ、なあにと聞いた。

「指きりさ、これをすればどんな約束でも絶対に守らなくちゃいけない」
「……絶対、約束ね？」

小さな二人が交わした小さな約束だった。

* * *

ヘルガはベッドの上でぱちりと目を開いた。窓の外には一つの月が光る。ヘルガは狼人間だが満月を見ても狼にはならない。本当にす

べてをコントロールできるのだ。隣で寝ているルイズは涙目だ。怖い夢でも見てるのかなと思いながら、その綺麗な顔を眺めていた。

「……宝石みたいだな」

月に照らされるご主人様の顔はとても美しく見えた。

「もつと髪が長かつたらもつと魅力的だつたのにな」

ルイズの髪は肩までだ。貴族はほとんどがのばしてゐるのにな。あ、姫さんは短いか。ヘルガはルイズの瞳から零れ落ちた雫をぬぐつてやつた。それにしても、前のご主人様ならありえないぜ。ベッドで寝させてくれるなんて。ご飯まで豪華なものを食わしてくれるなんて。いっぱいしてくれて、俺も何かできることはないのかな。

「よし、料理を作つてあげよう

ぽんとひらめいたヘルガは早速厨房へ駆け出した。確かルイズの友達が厨房にいるとか何とか言つてたな。確かシエスタとか何とか。「それにしてもでかいな」

「あのー」

「貴族達はいいねえ、明るい未来があつて」

「あのー」

「全く、どうして俺は貴族に生まれなかつたんだろう」

「あのー！」

ああ?とヘルガは声がしたほうに振り向いた。そこには黒髪のボブカット、顔にそばかすのある可愛い少女があびえている。

「あ、すまん……何のようだ?」

「あなた、もしかしてミス・ヴァリエールの使い魔さん?」

「ミス・ヴァリエール? ああ、ルイズ。そうだけど?」

「私、シエスタつて言います」

「ああ、俺はヘルガ……つてお前がシエスタか!」

その後、階段で話していたためシエスタが場所を移動しようといふことでヘルガを厨房へと案内した。途中で赤い髪をおした胸がでかい女に誘われたが無視をしてしまった。

「そうですか、よかつたわミス・ヴァリエールの使い魔が良い方で

「シエスタつてルイズの友達？」

「友達と言つか……私にとつては友達でもあるし、恩人でもあるんです」

「ルイズがシエスタの恩人？」

「はい、貴族様に叱られた時はいつもミス・ヴァリエールがかばってくれたりとか」

そういうえば俺が侮辱されたときも自分を差し置いてかばってくれたな。やっぱり良い奴なんだな。ルイズつて。

「まあその話はまたの機会で話しましょう? 料理を食べに来たのでしよう?」

「いや、料理はもうルイズに貰ったから。つくりに來たんだ」

「そうですか! それならシチューの作り方を教えてあげます」

俺はシエスタと共に厨房へ入つていった。

あの子と死と君の笑顔と

夢なのかは分からぬ。でも、多分これはほつらじ夢。誰かが傷ついた夢でもなく、失った夢。そう、誠也を失った夢。今まで自分でも怖くて一度も思い出さなかつた前世の恐ろしい記憶。入つて、いつ人生が終わつてしまふのか分からぬ。だから怖い。でもそんな事を思つていてもきりが無いから、ギルは前を向いて生きた。夢の中の俺は誰かと歩いていて、楽しそうに笑つていた。

「つて誕生日つて何時なの？」

「誕生日? 12月24日」

「クリスマスイブ?」

「の10日前」

顔は思い出せないけど、喋り方で女の子かな。でも、どうして友達のいなかつたギルが人と歩いているんだ……。少女の形をしているけど、全身が真っ黒だつた。でも、彼女以外の人間は普通に色がついていた。

「はは……じゃあもうすぐだ!えつと……」

「明後日だよ」

笑う彼女の笑顔は黒くて見えない。忘れているのは彼女なのかな。でも、どうして忘れたんだ? どうしてこの子だけ。

「誕生日プレゼント、何が欲しい?」

「……何でもいいの?」

「うん!」

「じゃあ13日、一人だけで誕生日会をしましょ!」

「え? でも君の誕生日つて14日……」

「引っ越しの……」

夢の中のギルの顔は悲しい顔をした。

「そ……そつか」

「うん。でも約束して? 必ず会つて! 今度こそ本当の約束よ?」

「うん！」

ギルは涙を堪えていた。また一人になってしまうのが怖かった。自分には家族がない。家族と言える人も、友達も。親戚も海外だし、本当に一人になってしまう。

「じゃあ13日、またこの時計台

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7994m/>

ゼロの使い魔 - 友情OR愛情

2010年10月17日04時35分発行